婦人と新社會

山田わか主筆

二月號

男女關係と母子關係
教育社會學
健全なる人生觀が現代政治の不安を一掃する
マグダレン・マルクス著『女』の紹介
『男らしさ』の定義を變更すべき時
ミル著『婦人の服從』の梗概
ある夕暮

每月一回一日發行　第拾貳號　大正十年二月一日發行



雛人形陳列會

―例年の通り二月一日より三月二日迄

雛の祭は年々盛んになつて參りました今年は大に努力の結果として新製の三越特製雛を初め、其他種々の變雛附屬品一式賑々しく南新舘に陳列致ます

◆◆春向友禪縮緬陳列

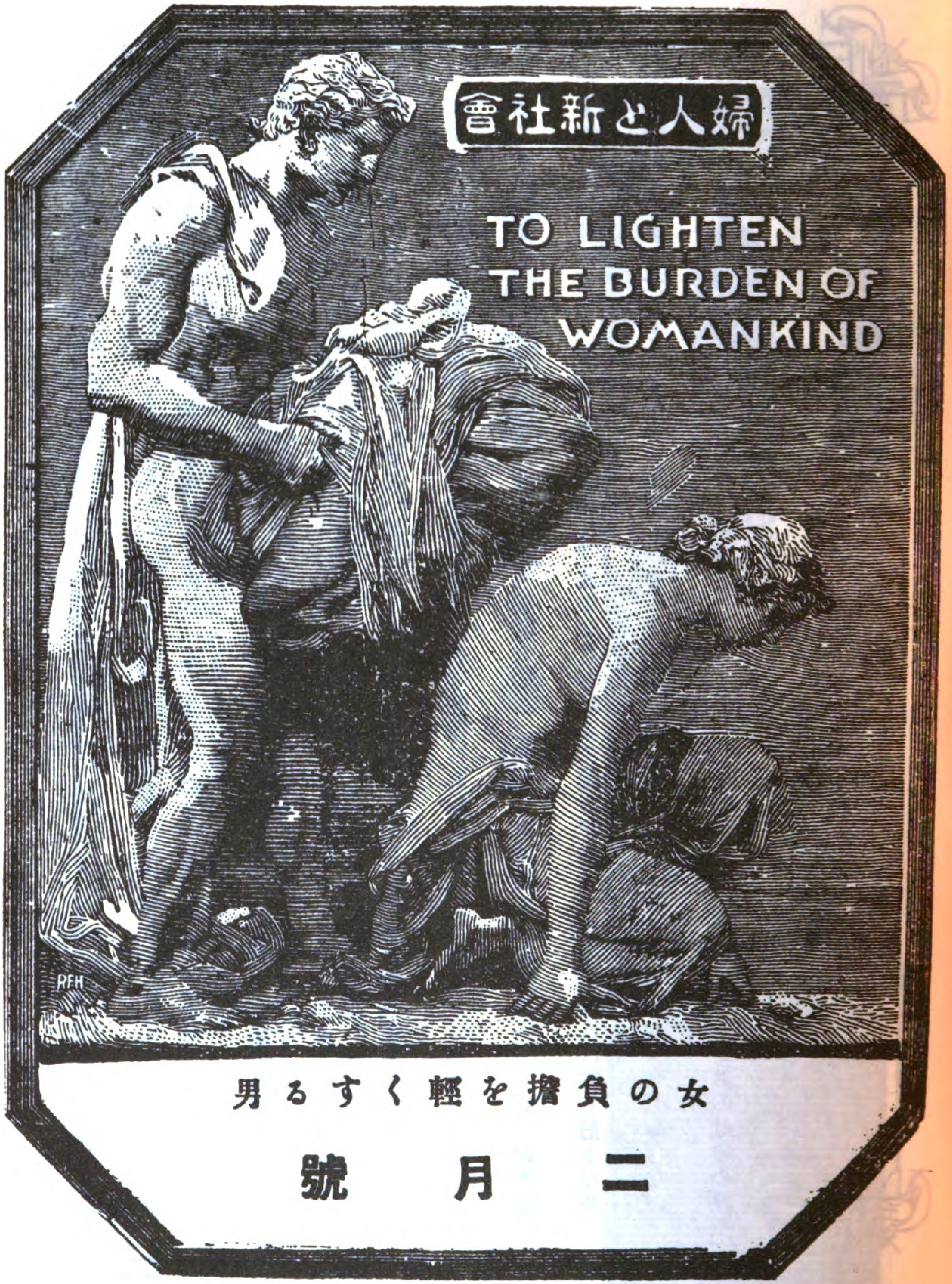
殊に春向のものを階下に陳列致します、二月十一日より

◆◆帶側陳列會

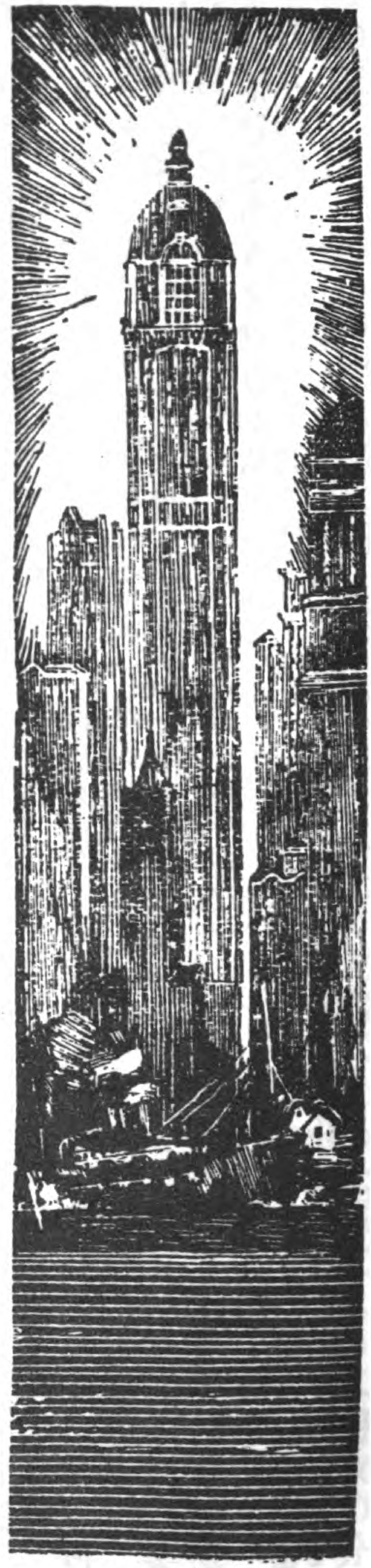
吉例に[illegible]流行の魁は三越のみにて二月一日より

◆二月の定休日◆二月十日◆◆二月二十五日◆

東京 三越吳服店


婦人と新社會
TO LIGHTEN
THE BURDEN OF
WOMANKIND
RFH
女の負擔を輕くする男
二月號

社會に對する生々とした義務觀念はうちを外にして歩いてゐる交際ずきな人間よりも親密な家庭のうちに立てこもつて居る人の方が強い。ゆるつたい交際場裡の空氣よりも家庭の空氣の方が人格を造るにより適當なのだ。歐洲の北方の人々は氣候が寒いためにいろりのめぐりに、つまり、家庭のうちにたてこもらなければならないから、外をぶらつく暖國の人々よりも雷同熱に抵抗する力を多く持つてゐる。家庭の精神を崇拜する人は容易に社會的の空想論に耳を借さない。要するに個性を發達させることは群集のうちよりも家庭のうちがより適當なのだ。家庭に計り居る人は廣さに於て缺目があるかも知れないけれども、併し、深さに於て、其の缺目を補ふて餘りがある。其の證據には話し好きな交際好きな印象を受けることの強い南歐のラテン民族が生垣のうちにいつもとぢこもつて交際をしない英國人よりも、公共のために多くの犠牲を拂つたと云ふ證據は一ッもない。（ロッスの社會心理學から）



男女關係と母子關係

一

女權主義者の信仰は女性の男性化であります。職業上、政治上、產業上、其の他あらゆる方面に於て男子と競爭し得る女子を造るのが其の目的であつて、其の目的に添ふように女子を敎育し女子の發達を計ろうとするものであります。女子には生來男子とは別な性質のあること、及び、男子とは別な作用を具有することを無視して、女性のためのあらゆる特權、母性の特權をも排棄し、そして、一切に於ける男子との平等

を要求します。政治上、社會上、教育上の同權、職業上の機會均等を確立し、男女同等な道德の標準を造ろうとするのであります。

シユライネルは其の著『婦人と勞働』に於て此の女權主義の目的を一言で云ひ盡しました。則ち『あらゆる職業の範圍を我々婦人に解放せよ。そして、我々婦人に職業教育を與へよ』と。そして、これが女權主義者の信條であります。則ち、性の差別を撤排し、男女の分業の意義を無視し、人生に於けるあらゆる方面の活動に於て、男女同等に共同して働かうとするのであります。

その結果、歐洲に於ける女權主義者は兩性の間に經濟上の恐ろしい爭ひを豫想してゐました。則ち、戰時中女子が得てゐた職業上の位置を、戰場から歸つた男子は取り返さうとするであらうし、と云つて、戰時中男子の代りとなつて働いてゐた女子は既に位置を占めてゐると云ふ强みと新しく得た參政權の力をもつて男子勞働者の其の要求を拒むでありませうから。

けれども、私は其れ等の女權主義の信條とは反對に兩性の分業を必要とするもので

あります。人生が男性女性に分けられてあることが必要であると同じように男女の分業は人間の進歩になくてならないものであると信ずるものであります。婦人は差し當りの自分自身にだけ都合のいゝことを考へるのでなく、目前の利益を未來のために犧牲にする、つまり次代の利益と云ふ一層重要なことに重きを置かなければならない、そして、さうするには性の別をます〳〵明かにしなければならないと私は信ずるのであります。

人間の進歩は兩性の全く反對な性質から結果したものであります。男女別な特長、別な適合性、別な職分をもつてゐて、それが遺傳され發達して、ツイに、人類は今日に迄進歩して來たのであります。進歩的な分業、活力を專門化することによつて人間の性質と能力がます〳〵より高い度に進歩して行つて、そして、男女兩性がハツキリとした分業をもつようになつたことは人類の歴史に於て最も稱讚すべき域に達したのであります。何年何代かを經てやうやく達し得た其の男女の分業を男女が忠實に見識をもつて守り、其の分業を益々發達させ完成させることが今後の男女の義務でありま

す。それが進歩の道であります。

今日迄に發達して來た此の男女の別を無視し自然が與へた秩序、先代人が努力して築き上げた此の分業を破壞しようとするものはとりも直さず今日迄に建設された文明を破壞し、進歩の代りに瓦解を招かうとするものであります。

自然は驚くべき巧妙さをもつて男と女に別な身體の構造、別な情性、別な能力を與へました。そして、かくの如くに全く兩性を異つたものに造つた目的は別な作用をもつ兩性の間に競爭や對抗を避けさせるためであります。別な能力と別な作用とをもたせてお互に賴り合ひ助け合ふて、そして進歩の軌道の上を歩ませようとしたものだと私は解釋します。そして、此處に相互の信用と愛と友情と云ふものが養成されます。

けれども、今日の女權主義者の議論と其の實行はこれ等の最も秀越なる自然の先見と用意とを無視して無駄な男女間の個人的の競爭、經濟上の競爭、乃至は、あらゆる利益の衝突を起して、そして、此の自然の調和を破らうとするものであります。

宗敎に關してのいゝ加減なうそ議論は世間に隨分少くないけれども、凡そ、うそ議論の多いことに於て、宗敎に次ぐものは婦人論であります。男と云ふ政治的、經濟的人格的の壓制家が婦人を踏みつけてゐたと云ふことは事實であります。けれども、其のために婦人が何等爲す處がなかつたと云ふのは虛であります。女權主義者は、壓制されてゐる狀態から婦人を救ひ出し、そして、無爲であつた婦人を有爲なものにしようとするのですけれども、併しそれが全然方向を誤つてゐるのであります。婦人は壓制されながらも決して何にも爲さずにゐたのではありません。第一、婦人は今日迄人種を繼續して來ました。

人間種族が今日の發達に達した迄の經路は容易なものではなかつたのです。人間はめくら搜しに道をたづねて、時には衝突したり、倒れたり、つまづきながら搜し當た道を又失つたり。實に我々祖先の步いた道は苦しい骨の折れる險しい登り坂であつたのです。そしてそれが進步の道であつたのです。實に人類の歷史は決して止まない決して力を弱められない、死と云ふもののない勞力の歷史であつたように思へます。代々

新たにされ、そして、新しい力を得るたびに努力は一層烈しくなつたように思へます。新しい目的、新しい問題を認める度毎に人間の努力はます〱擴がつて行つて、そして、生活はます〱複雜になりました。一歩々々と進めば進む程、複雜の度は增したのであります。ですから、人間に付いて論ずるに當つては無限に複雜と云ふことを忘れてはならないのであります。

創造的進化と云ふことは思想と云ふ精神を中心にして其のめぐりに物質が進步的にあつまつたものを云ふのです。そして、其の思思は徐々と、無限に小さい度に於て具體的になつたものです。丁度設計圖に從つて煉瓦が積まれて建築が出來上がつて行くように。どんなに小さいホツタテ小屋でも前もつて一つの考へがなければ決して具體化しません。

過去の凡ての衝突の時代から、則ち、混沌たる狀態から秩序が生れ、秩序から進步が生れたのでありますが、これには絕へざる計畫則ち思想と努力があつたのです、此の計畫と努力によつて人間は生來持つてゐた盲目な力とそれから物質とを征服して來

ました。そして、物質を征服する仕事に重に干與してゐたものは男子でありました。其の仕事には男子の爭鬪的な力が必要であつたのです。そして男子が奮闘しようとする意志の裏面には婦人を保護したいと云ふ慾望がキラメイてゐたのです。此の婦人を保護することは人種を保護することであつたのです。男子が環境と又は敵と戰つて自分の並びに妻子の食物を得たり生命を保護したりしてゐる間に、男子からの其の扶助と保護を受けてゐた女子は次代の養成者、教育者であつたのです。

ですから、男子は生理的には女子よりも多く働き、多く苦しみ、そして、より高く發達致しました。けれども、心理的には女子の方は男子よりもより多く苦しみ、そして、よく高く發達致しました。常に物質にかゝはり物質のために苦しんでゐた男子とは異つて重もに精神的に苦しみ働いて來た女子は男子よりも一層高尙な心理的發達を遂げたのでありますが、これが則ち女性の特長なのであります。烈しい生存競爭に忙殺されて男子が人間性と云ふことに付いて忘れてしまつてゐる時に、女子は其の人間性を守る特權をもつてゐたのです。

女子は自分のため子供のために常に外界と戰はねばならぬ男子のために安眠の出來る處、則ち、更新の氣を養ひ得る場所を、則ち、ホツタテ小屋を造りました。これが建築學の土臺であります。女子は夫が外で受けて來た疵を癒やすためにあらゆる工夫を凝らしました。これが醫術の始まり、人道の芽であつたのです。

三

人間の力には制限があるからして、一方に費す力は他の方面から養はれなければならないのです。戰爭のために、又は、食料を得るために男子が費す力は女子によつて養はれました。けれども、男子の其の仕事は直接には何等の進步にはなりません。けれども、男子の其の働きがあるために、則ち男子の保護があるからして女子は落付いてゐることが出來て建築學の土臺を造つたり、醫術を開始したり、人道の芽をはぐゝんだりすることが出來ました。

つまり、女子の働きは男子の保護と相待つて人類進步の一階段を登ることが出來たのであります。

進歩は平和の時に於てのみ始まります。藝術は餘裕のある處に生れます。男子が生命を賭して女子を守るので女子には餘裕がありました。女子は自分のために働く男子を慰めるために、ホッタテ小屋を飾ろうとして花を摘みました。粘土をとつて器を造りました。後には其の器に意匠をするようになりました。これが藝術の始まりであります。

戰鬪を仕事とする男子は腕力の延長として棍棒を發明致しました。

女性の特權によつて男子から保護を受けてゐる女子は魚の骨から針を發明致しました。

男子が戰鬪的氣質を子供に移すと同時に、女子は女らしい優しい氣質と平和な生活に必要な技術とを子供に傳へました。そして、男性の戰鬪的氣質を矯め人道化しました。たとへ、女子の生來に優しい人道的な、環境と調和する性質があつたとした處が男子の戰鬪的保護がなかつたらば女子の其の性質は進化する機會を持たなかつたであります。

或る論者、たとへば、シユライネルの如きは男子が女子を保護するのは感情の結果だと云ひますけれども、これは感情に出立したのではなく本能的であると私は考へて居ます。種を保存し、永續させるための自然の計畫であると私は推測致します。

私は曾て生命の歴史を讀んだことがありますが、蟹のような下等な動物ですら、雄が雌を保護する本能をもつてゐます。蟹と云ふものはあの固い殼で全身を保護して居るものでありますが、あの殼は大きくならないで、蟹が成長するためには一々あの殼を捨てなければならない、つまり、ぬけかへるのだそうです。ですから、舊い小さい殼を捨てゝ新しい大きい殼を持つ迄は殼なしで居なければならないので、其の間は非常に弱くて容易に敵の生餌になつてしまいます。で、殼の無い間は大抵、岩の間などに這入つて自分を保護してゐるのでありますが、此處に興味のある事實は雄と雌のぬけかへりが決して一所に始まらないことであります。雌雄一對のうちで必ず雄の方が一ヶ月乃至一ヶ月以上早く其のぬけかへりが始まるのであります。そして、雄の其の仕事がすつかり濟んで、雄が大きく丈夫になつた時分にそろ〳〵雌のぬけかへりが始

まるのであります。そして、雌が意氣地のない狀態にある間は雄は四六時中雌の傍に居て保護を與へて居ると云ふことであります。時とすると雄は自分の體を全部雌の上に覆ひかぶせて全體的に保護して居ると云ふことであります。さう云ふやうに常に保護を受けてゐる雌の身の上は比較的安全でありますけれども、雄の方はたびたび冒險をするので、一體、蟹には雌が多くて雄が少いのださうであります。そしてこう云ふ狀態はあらゆる生物のうちにたびたび見られることだと云ふことであります。

四

生殖の業は男女が共同することによつて營まれるものであります。けれども、男子の役目は僅かで簡單であります。父となるために男子は生理的には何等の苦痛も又日々の生活にも何等の干渉をも受けません。けれども、女子はウォードの云ふように種族其のものであります、女子は自分の血、自分の骨自分の活力をもつて種族を創造するのであります。

十ヶ月の間子は母親の一部であります、母の胎内に生活をし、母體の温度によつて

あたゝめられ、母體の血液によつて養はれてゐます。母は胎兒のために呼吸し、胎兒のために食物を消化し胎兒のために運動をします。十ヶ月間の子供の生命は全く母の生命と一ッであります。十ヶ月の後、體は二ッになつても、まだ、母と子は一體であるような狀態を暫くの間は續けます。子は全く母の手によつて生きて居るような狀態に居ります。其處で母と子の間には切ろうとしても切ることの出來ない強い太い感情と云ふ精神的のかすがいが出來上がつてしまいました。

極く下等な俗惡なものを除く外は凡ての人間が愛のために其の性質を變へさせられそして、生活を高尙にさせられるものでありますが、其の愛の起源を私は此の母子關係に置いて居ります。

けれども一般の人は此の愛の起源を男女間の情愛に置いてゐます。文明國人はあらゆる種類の情愛のうちで男女間の愛を最も力強いものとなし最も優勢なものと見てそして其の愛は兩性間の本能的な引力から生れたものとしてゐます。本能的の引力から情愛が生れて智力の成長となり延長となつて其處から今日のローマンチックな愛とな

り、高尙な詩となり、小說となり、藝術となつて、最も豐富な最も廣い優秀な精選された靈感と衝動に迄發達したものとされてゐます。

けれども、初期の人間の男女關係を考へて見ますと其處に愛情と云ふ要素がなかつたことは容易に想像出來ます。同情や、溫情や、自己犧牲と云ふことは未發達な男女間にはないのでありますo 野蠻人は異性に對して愛を感じた結果結婚するのではなく便宜上結婚しました。愛がないのですから求愛もなければ戀歌もなかつた。唯、働かせるために、又、情慾の衝動から配偶を求めました。唯、生物學上の本能が要素になつてゐて情緖が要素になつてゐたのではありません。

野蠻人計りでなく現代の文明人の中でさへ情緖を要素としないで唯生物學上の本能が要素となつて成立する結婚が澤山あります。結婚は戀愛を基礎としなければならぬと云ふ主張や、便宜結婚に對する攻擊や、又は、戀女房とか想思の夫婦とか云ふ言葉が存在するのは戀愛のない結婚や便宜上の結婆が存在することを語るものでありま す。

精選されてゐない人達の結婚は愛には關係がないのであります。其處で愛は兩性關係から生れたものだとは云ひ得ないと思ふのであります。

最も最高度に發達した貴い男女間の性の本能こそ愛と理解によつて精神化され純化されてゐますけれども、そして、此處迄凡ての人間が發達しなければならないのでありますけれども、まだ、今日の多くの男子の性の本能は今日の文化を所有してゐるにも拘らず依然と元始時代の本能のまゝであります。利己主義的で、そして、性の作用が唯單に獸慾となつて現れてゐる場合が少くないのであります。

五

人間の能力は、特別の機關を造つてつまり分業とすることによつて發達して來ました。腦髓は意識の機關として働くために分業となりました。見ること、聞くこと嗅ぐこと、皆分業であります。けれども、下等な有機體にはさう云ふ分業がありません。

情慾は前にも申しました通り愛ではありません。けれども、能力は生理的な作用のうちに其の根源をもたねばならぬものでありますし、其の生理的の作用は、又、生理

的の機關をもたねばならぬものでありますが、其の愛と云ふ能力、自己を全く忘れる利他的な獻身的な、優美な愛は何處から生れて來たかと云ひますと、それは男女關係からではなく、母子關係から生れて來たのであります。『愛は最初から愛であつて低い愛高い愛と云ふものはない。だから、低い情慾から生れて來たものではない』とドラモンドは云つてゐます。

父子關係とは比較にならぬ程密接な複雜な母子關係から愛は生れました。そして親としてのその本能は凡ての外の本能の發達とは別に、外の本能には超越した發達を遂げました。親は子供の利益のためには自分を投げ出し一切を自分に否定致します。親の本能は自己中心の個性を直に利他中心の個性に變へてしまいます。一寸したことにも直に腹を立てゝ人につかみかゝろうとするような女でも自分の子供のためには鳩のやうに優しくなります。自分の食物を得るためには他人に對して何等の假借する處のないやうな人間でも自分の子のためには自分自身をさへ食物にしようとします。又、最も優しい最も憶病な女性でも、自分の子供を保護するためには鬼人のやうになりま

す。本能と云つてしまへば其れ迄でありますが、併し、此の本能は全くヒロイックであります。しかも、此の本能の働きは盲目的から智力的に發達して行きます。子に對する愛が衝動となり刺戟となつて親のあらゆる能力は發達し進化して行くのでありま す。

さうして發達し、進化して行く進行中、母子の間に生れた愛と云ふ情緒は其の純粋な其の優美な性質を、情慾と云ふ引力に附與しつゝありました。つまり、生理的の引力と云ふ火のやうに烈しい精力に献身的な優しい愛を結び付けました。亂暴な野蠻性を帶びてゐる男子に愛の要素を植つけました。其の結果、兩親は精神化され智力的になり優美になり、そして、ます〳〵優秀な子供を造ろうとするようになりました。

親の獻身的な注意がなかつたならば赤子は生れて後數時間で死んでしまうでせう。けれども、自分の生命に代へても保護しようとする母の愛があるので子供は成長することが出來ます。子供は食べることから、着ることから、寢ることから一切の世話を受けなければなりません。朝から晩迄、否、寢てからも母は子供に奉仕致します。子

供は自分で自由がきくようになつても、矢張り、衣食住の世話を受なければなりません。どんなに貧乏人でも子供は十二三年間は親の世話を受なければなりません。

高尚な職業を覺へようとすれば二十二三年乃至二十四五年は親の世話を受なければなりません。人間が進歩すればする程、子に對する親の責任は數限りなく增大して行きます。そして親が子に對する其の責任を全ふすればする程、環境に對して全く無力な子供の生存の機會が確實になり、子供はより高い發達を遂げることが出來ます。そして、これが自然の計畫の一部であります。これが人間の生活の高尚な目的であります。此處に婦人の最高な努力を要する點があるのであります。

兩親としての義務の中心點は、親としての義務を果すために兩親は全く新しい、そして、內容的な能力の調節を計らなければなりません。ますます複雜になつて行く環境に子供は複雜に適應して行かなければなりませんから、そして、又今は、生理的に心理的に人間進步の革命期に到達して居りますから兩親は子供に對して最も經濟的に同時に最も効果ある方法を選まなければなりません。そしてさうするには男女が同じ

ような勞働に從事してゐてはならないのであります。

六

加州の鑛山の中に殆んど一生を費し、文筆をもつて、荒くれた鑛夫を感化しようとつとめた詩人であり、そして、小說家であつたブレット・ハートは、生れてすぐに母に死なれた父無し子が如何に野獸のような鑛夫の團體を精神的に向上せしめたかを書いてゐます。愛とか、同情とか、淚とか云ふものはまるで他界のものでゞもあるように荒びた氣持ちに慣れてしまつてゐる鑛夫達も生み落されると同時に孤兒になつた可憐な赤子の上には皆等しく同情を注ぐようになつたのであります。其の赤子はラックと名付けられたのでありますが、一人の鑛夫は人差指でラックの柔かい頰をさはつてあやなして居ました。するとラックが笑ひました。鑛夫は、

『ああ、ラックが笑つた。笑つた。私の指でラックが笑つた。』

と夢中になつて叫び、そして、其の時の胸に一杯になつた感情を一言で云ひ盡さうとして暫く考へた後に、

『あゝ、可哀想な赤ん坊！』

と云ひました。そして、赤子を笑はせた其の指をいつ迄も外の指に觸れないように別にしてゐたと云ふのであります。と云ふのは五本の指が俗塵に汚れてゐるのだけれども、其のうちの一本は今無心の赤子の頰に觸れ、そして、赤子を笑はせたことによつて神聖化されたから、其の指を外の汚れた指に觸れさせたくないと云ふのであります。

そして、これは、愛は親の作用から生れて來るものであると云ふことを說明したものであります。つまり、愛は親の心のうちに其の芽があつて、そして、親が其れを成長せしめたと云ふよりも、愛は子供が親の心に植つけたものだと云はうとするのであります。

かくの如くに愛は親の作用から生れて來るものであると云ふことを考へて來たのですが、と云つて、それは親の作用であると一言で云つてしまつて打ち捨てゝ置くべき問題ではありません。一言で親と云つても親は二人あつて、そして、父親としての役

目と母親としての役目はそれ〴〵によつて非常な差があります。父親は自分自身並に妻子の生存を維持するために衣食の料を得ねばならぬと同時に姙娠哺乳と云ふ生理上の役目と教育と云ふ心理上の役目は全く母の仕事であります。

男子の生殖作用は前にも云つた通り極く簡單なものでありますが女子の方は多くの危險や苦痛を通らなければならないのであります。姙娠中の危險や苦痛は無意識のうちに通つてしまうのでありますが、分娩後は其の無意識を有識となし、そして、不任意な犧牲であつたものを任意な犧牲に代へるのであります。

母親は自分の體の一部をもつて分娩後も子供を養ふことを續けます。勞力に智力を加へて子供を養育しなければならないのであります。さうして居るうちに母親の心に愛はだん〴〵大きくなつて行くのであります。姙娠中も母親は子供のために全く犧牲になつてゐるのですけれども、それは今も云ふ通り全く無意識、不任意で、唯、生物學上の作用を行つてゐるだけであります。

始めてやどした胎内の子に對して愛を感じる母は少ないものです。けれども、赤子

を自分の腕にかゝへた時、岩間から美しい清水がにじみ出て來るやうに、母の心から愛がにじみ出て來ます。愛の作用は其の愛を投げかける目的物が無ければならぬものである故に母の愛は赤子を其の腕に抱へた時に始めて目覺めて來るものであります。そして、人間の持前である利己主義を有識に任意に利他主義に變へて行くのであります。其處で、利他主義の源は母にあると云ふのであります。

七

獻身的行爲にはいろ〳〵種類がありますけれども其の凡ての內容の源泉は母子關係にあるのです、子に對する母の利他的な優しいあこがれのうちに人間の愛は始めて生れてそして有識な作用をするようになつたのであります。

『凡て、禮儀と云ふものは深い道德上の土臺の上にのッかつてゐる。』とゲーテは云つてゐますが、其の道德上の基礎と云ふのは大きな生物學上の作用を云ふので、そしてそれは子に對する母の作用と云つてもよいのです。あらゆる犧牲的行爲即ち憐憫同情慈悲及び其の他の獻身的となる衝動は單に生理的なものだと云ふ人もなくはないの

ですけれども併しそれは皆親としての作用のうちに其の靈感と源を持つてゐるものであります。

母の血が乳となること、母は自分自身を子供の食物としてゐること、子供のためには自分を忘れると云ふことのうちに一切の愛と犧牲の源があるのです。この本能的の犧牲の進化によつて母性のみならず父性もそれから兩性間の肉慾も純化されそして人間は向上したのであります。

意氣地のない赤子のために自ら進んで胸をひろげて赤子に乳房を含ませた最初の女が凡ての文化の母でありました其の母によつて愛と云ふものが始めて人間の意識に登つたのであります。何代も〳〵の間母が進んで優しい犧牲を拂つて來たことによつて人間の愛は盲目な無意識な暗やみの中から大きな明るい光明へと躍り出で來たのであります。けれどもドラモンドは次のように云つてゐます。

「世界には今母は滿ち〳〵てゐるが、併し父はゐない自然は母と子を親密に結び付けて置いたことによつて母を造ることには成功したが併し父は今尙ほ森の中を彷徨し

てゐる野獸の域を脱してゐない。けれども彼に進步の餘地は與へられてある男も今父たることを學びつゝある。人間として必要な課業を學びつゝある。人間らしい同時に男らしい生活は搖籃の傍に美しさをあつめる愛情の德と同じやうに人間の生活には必要であるけれども其の男らしい生活の要素、力、勇氣、忍耐、自信と云ふ精神の力は家庭以外の處では得られない。

『であるから、もし、母性が弱い時代にあるならば父性と云ふものゝ存在しないことになる。鳥類を離れて哺乳動物を見るならば父性は殆んど皆退步的である。多くの雄は彼等の子供等に無頓着である許りでなく時とすると我が子を敵視する。肉食動物のうちには母が子供を隱してゐることがあるがそれは子が父に食はれてしまうからである。』と。

八

其處で、もう一ツの問題が起つて來ます。もし、愛が高尙な母の作用から始まつたとしたならば、母の資格を缺いてゐる人、親としての經驗をもつたことのない人で、

矢張り優美な愛情をもつてゐるのはどうしたことかと。これに對して、無雜作にそれは母方の遺傳によるものだと普通に云はれてゐるけれども、複雜な生物學上の問題はさう容易に說明出來ません。自然は一定の過程をキチンと踏んで一ッ〳〵の順序を經て進んで行くものですから。どうしても一定の生物學上の道程を探さなければ、どうして母でないものが母の本能を持つようになつたかと云ふことは說明出來ません。

けれども、もうそろ〳〵結論に向はねばなりませんので其處へ這入つて行くと、又無暗みに長くなりますから、其詳細を探すことは又の機會にゆづることに致します。

いづれにしろ、兩性の生理作用と心理的の屬性は非常に異つてゐます。母の本能は全く父性には異物であるようになつてゐます。

そして、さうなつた理由は母は母の作用を進めて行き、父は父の作用を進めて行つたので、この二ッは一ッの原則では說明できなくなってしまつてゐます。

で、進化の傾向は兩性の特長と云ふものがだん〳〵別れ〳〵になつて行くものでそれが人間進步の重要な現象となり、そして、全く反對の衝動と能力を發達させたこと

によつて文明は出來上がつたと考へられるのであります。

野蠻人及び半開人に於ては兩性間の人格的及び氣質の違ひが甚だ僅でありますが、文明に近くなるに從つて性の差はだん〳〵甚しく、複雜に、そして、だん〳〵はつきりして來ます。則ち、女はます〳〵女らしく、男はます〳〵男らしくなるのでありま す。そして、生理的に心理的に男性の特長が女性の特長と隔たりがあればある程其れは人間として完全であるのです。つまり、高等な男女のタイプは劣等な男女のタイプよりも男女の差が甚だしいのであります。

又、幼年から少年青年と人間として最高な域に進む程、男女の別ははつきりして來てそして又、老年になつてだん〳〵衰へるに從つて、つまり、人間が退歩的になるに從つて男の老人は女らしくなり、女の老人は男らしくなります。又、婦人病の療治をして女性としての作用を失つた女の氣質及び容貌迄が男性化して來ると云ふ例はよくあります。これによつて見ても、男女の差は益々大きくなつて行くのが進歩の順當な道であります。そして、一ツの性は他の性によつて補はれるようになつてゐるのです

から、男女の差が大きければ大きい程、女として又男としての價値が大きいのであります。

兩性の引力、同棲することの興味と幸福は一方が缺いてゐる處を他方から補つて貰ふ、つまり各々が缺いてゐる性質や感情を供給し合ふ度に比例するものであります。男らしい女、女らしい男は人間として最上なものでなく、且つ又、本當の男本當の女の生活に靈感を與へたり、チャームある調和を造ることは出來ないのであります。さう言ふ男女は最も豐かな最もスイートな最も神聖な情緒を知らず則ち、本當の幸福を味はふことが出來ないのであります。

普通には凡ての男には女性的分子が潛在してゐるし、凡ての女子には男性的分子が潛在してゐるのでありますが、發達するに從つて其潛在性は益々潛んで行きそれぞれ固有の性が發揮されるのでありますが、退歩するに從つて其の潛在性がだんだん頭を擡げて來るつであります。そして、女性的男子が出來たり、男性的女子が出來たりしてはんぱな人間が出來るのであります。

九

一定不變の法則と正しい過程とを經て、自然は絶へず其の仕事を進めてゐます。私共人間から見て或ることが不規則に行はれたように思へる時にはそれは私共の觀察が足りなかつた結果であります。人間の生理的及び心理的の二元性の問題は生物學者のみならず、哲學者、宗敎家、其他あらゆる觀察家に非常な困難を與へました。從つて其の二元性に關して書かれた書物は澤山あります。そして、幾分の眞理はつかまれてあるには相違ないのですが、誤解に陷つてゐる點も決して少くないのであります。そして、其の誤解が婦人問題の全體の根に横はつてゐるのであります。この誤解が婦人問題に動機を供給したのであります。そして、婦人問題の宣傳と實行に非常な害を與へました。なぜなれば、男子の力が經濟上有利であると云ふ事情に、女子のうちに潜在してゐる男性的分子を連結して、そして、女子の女子たる氣分を抹殺して男子らしい氣分を造つて、そして、男女平等を叫ぶ女權論となつてしまひました。

けれども、これは單に女子のために又は男子のために不利益である許りでなく、人

道のために不利益であります。もし、男子が女性的分子を多分に發揮したならば男子のために非常に不利益であると同じように女子が女子のうちに潜在してゐる男性的分子を發揮することも亦自他のために不利益であります。

今日の多くの女權論者は今云つた男子のうちに潜む女性的分子女子のうちに潜む男性的分子を見て、そして、男女は同じものであるとして居るのです。此處から婦人論を進めてゐるのです。

男女平等を信條とする女權主義者の主張の重もなるものを擧げて見るなら、女子の個人としての自由、個性の發揮、經濟上の獨立でありますが、此の個性に付いて、經濟上の獨立に付いて、及び、男女兩性の出來た原則に付いては前號「母性の革命」のうちに書きましたから此處には略すことに致します。

ミル著『婦人の服從』の梗概

第三章

男子は政治上の作用及び其の他の智力的獨創に都合よき好機會を獨領してゐる

1

婦人を政治生活及び經濟的有利な職業に入らしめない目的は婦人を永久に家庭生活に服從させて置かうとするものである。こう云ふ動機から道德的に盲目になつてゐるものは別として、併し、今日に於ては、誰でも、最下級な男子に法律上許されてある有利な職業を婦人に拒むことの不公平を認めてゐる。有利な職業に婦人の入るを拒むことは、社會則ち男子のためと云ふ理由から論ぜられるのが以前には習慣であつたが、併し、今は婦人の智力的の無資格、又は、不適當と云ふ理由で婦人は除外されてゐる。併しながら、此の理由を一般の人に承諾させるには最も低級な男子でも男子は最も秀でた婦人に優つてゐると云ふことを立證する必要があるだらう。

それが立證出來た時に始めて男女間の

競爭の無用を主張し、婦人に職業を拒んでも差し支へないわけである。併しながら、どんなに婦人を安く見つもつても多くの婦人が男子と同じように男子が爲したと同じ仕事を完成し得たと云ふことを拒むことは出來ない。して見たならば婦人に職業上の競爭を許さないことは社會にとつて大きな損失ではないだろうか？相當な名譽の分前を婦人に拒み、婦人自身が責任をもつて職業を選む權利を婦人に拒むことは不正なことではないだろうか？

2

公的性質の仕事に今私の議論を限つて見る。第一、選擧權に關して話して見る。自分で政治をとつて居られない人が政治を主宰する人を選む權利を持つてゐる。投票は自家保護の手段である。で、男子に對して投票の亂用を防止する手段が婦人の投票亂用に對しても應用出來る筈である。且つ又、婦人の利益が男子の利益とは違ふと云ふ處にも、婦人の正當な考察に對する保證として、婦人の投票權が必要である。奴隷ですら法律上の保護を要求する。けれども、奴隷のための法律を奴隷の主人が造つてゐる以上は奴隷を保護する充分な法律は出來ない。

3

選擧權を持つに婦人が適當か不適當かと云ふことを論ずる必要はない。男子の無資格を除外する組織は婦人の無資格者をも除外するであろうから。不適當な男子をも除外しない不完全な組織が、不適當な女子を除外しなからと云つて、其の

組織が一層悪いものであるとは云へない。であるから、唯、二三人の適當な婦人がある以上は、社會の利益のために投票の門戸を婦人にも開くべきである。

4

婦人が既に現した婦人の資格に付て考察して見よう。婦人が今日迄に男子と同じような仕事をしなかつたことが婦人の能力の否定にはならない。婦人が男子と同じような仕事をしなかつたのは婦人が其れに對する修養を持つて居なかつたからである。併し、婦人が男と同じような修養をもつて居なかつたにも拘らず、時々、婦人が現した手腕は婦人にも投票權を與へねばならぬ決定的の證據である。エリザベス女皇やジャンダークが婦人であつたことは事實である。けれども、此の二人の婦人と同じ方向に一般の婦人が行くことは法律上禁じられてある。

5

歴史によると、男子よりは婦人の方が世の中を治めるに適して居ると云ふことが示されてゐる。つまり、王様よりも女王の方がうまく國を治めたのである。けれども、それに對して男性中心の論者は云ふ。王様の治世には後に女がゐて干渉するからだ。けれども、女王の後には男が居て助けるからだ。と云つて歴史上の其の事實に反對しようとする。

6

王様と女王の統治を委しく調べて見ると其の反對論の嘘と云ふことが明らかになる。

7

男子と同じ活動の範圍を許された唯一の婦人は王家の婦人のみであつた。もし、王家の婦人が政治的の有資格者であるならば、他の階級の婦人も彼女等の夫や兄弟と同じように政治的の資格をもつて居る筈である。

8

歴史的の事實は婦人の才能に關する最善な一般法に一致して居る。それ等の婦人の才能は單なる事情の生産物であるかも知れない。併し、彼女等は確に或る手練を持つて居る。則ち、彼女等は實際的である、現在の事實の內容を見る目を持つて居た。

婦人が男子と同じような智識を持つて居れば、婦人は男子よりも目前の問題を解決するに却つて早い。今日迄の一般の婦人は經驗と一般智識が足りない處から實際上の問題に誤まりがあつたので、智識を利用する能力がないのではなく、智識がなかつたからである。

9

一團體の一部分としてよりは、むしろ、個人として事物を取り扱ふとする女性の傾向、及び、感情と云ふことに男子よりは一層深い興味を持たうとする女性の特長は、單なる抽象的の問題に重きを置きすぎる男子の缺點を補うものとして婦人は政事上有用なものである。

10

婦人のそれ等の性質は賢い總括法を造るのみならず實際上の原則の適用にも價値ある助けとなる。婦人は一般に、凡て事の場合に於て其の場合の眞價によつて事

を處置する。賢い婦人のもう一ッ男に勝つた點は理解の早い事である。これが婦人を實行に適さしめて居るのである。

11

婦人は男子よりも神經質であつて動搖し易いと云ふつても、もし、婦人の神經が一定の目的に向つて利用されたならば其の神經質と云ふことの大部分はなくなつてしまうことを記憶しなければならない。又、神經質だからと云つて能率が減るわけのものではない。却つて、神經質は興奮の狀態を續け、ものに着實で、そして、實行的首領の任を果さしむる。又、强き感情は自制の道具となり得る。其の證據には佛蘭西國民のように感じ易い人種が學問に於て、商業に於て、法律に於て、戰爭に於て、さう感じ易くない國民にいつも優つて居るとも劣つて居ない。

12

一ッの問題から他の問題に智力のバネを緩めないで速かに移り、計畫して行く資格は、一ッの問題にのみ注意を集中してゐるよりもより多く價値ある天分である。そして、婦人は此の天分を豐富に持つて居る。婦人は修養によつて其れを持つてゐるが、恐らく、これは婦人の天性であるかも知れない。

13

時としては女子の腦は男子の腦よりより小さいと云ふ理由の下に女子は男子と競爭する權利がないと云ふ議論が起る。併しこの事實はまだ疑問であつて、しかも、腦と智力との關係に付いては今論爭中なのである。腦の大小は其作用にも違

ひがあるかも知れない。併し大きさのみが其の作用の差の原因ではない。質と云ふものも量と同じく數に入れなければならない。そして女子の仕事の優しい事がその質を優雅にして居る。其の上に女子の腦の血の循環は男子のよりもより早いと云ふ利益を有つて居る。であるから、女子の腦がより早く疲勞すると云ふならば、其回復も亦一層早いかも知れない。

14

國が異へば女子の性質に關する一般の考へも違つて居る。其國の事情に從つて女子の性質のあの點、又は、この點が認められて居る。けれども之等の觀念の相違の原因をたどつて見るとそれは境遇であつて婦人の特性ではない。英國は人間天性の研究をしない國である、何故なれば何れの國民よりも英國民は法律に從つて行動を取り、又、感ずる國民であるから。

15

男女の間の心理的相違がどの邊迄人爲的のものであるかは今の處知る事は出來ない。併し外部の影響からの心理的結果をたどる事に依て推測することは出來る。

16

例へば、最高な哲學、科學或ひは藝術が女子の仕事でなかつたと云ふ事は外部の影響からではなかつたか?

17

第一に我々は幾人かの女子がこの方面に彼女等の能力を試み始めてから僅か百ケ年足らずを經過してゐるのであること

を知る。百ケ年は充分な年月ではない。併し、文學に於ては女子は男子と同格であると云ふ豫想通りに女子は成功して居る。

18

併し乍ら女子は思想界に一紀元を造るやうな思想を且て生んで居ない、或ひは又藝術に於て新しい學派と稱ばれるやうな概念も生んで居ない。

19

兎に角記憶して置かなければならない事は高尙なる創作を爲すのに專門の知識が必要條件とされて居らなかつた時代に於ては女子は哲學には關係しなかつたが以來創作は精巧なる訓練を受けた人々以外には不可能となつた。創作に必要な準備をする迄は、經驗は女子の創作力を立證しなかつたと云ふことはできない。

20

女子が創作力を有つて居つた時ですらも、その貴い思想を啓發させ或ひは發表させるやうな友人の缺乏からその思想も失はれがちであつた又失せないにしても男子の思想のやうに見えたのであつた。

21

純文學と藝術に於て、巧みなモデルが想像を支配し、過去に於て存在したものよりは一層偉大である天才の外は、どうしても模倣に行かなければならなくなる迄女子が此の方面に這入らなかつた事は不幸である。

22

輿論は藝術界から女子を除外せぬと云ふ事は事實である。併しながら、女子は

只素人として迎へられて居た。確かに、女子の作物は素人の男子のそれと比較されてゐたのである。藝術家である二三の女子は同じ境遇の下にある男子から期待されて居るのと同じような創作を現す。又今日に於ては美術は最高なる創造力ある男子を引付けない、と同じ理由で同じやうな力を持つ婦人をも引付けない。今は天才は他の方面に其の力を向けて居るが、恐らく音樂は例外であるかも知れない。けれども、獨逸と伊太利のみが大作曲家を出して居る。而して之等の國々に於ては女子は高尙なる才能に關する修養はして居ない。

23

兩性に對して同じやうに開かれて居る職業に於ても、女子は男子と肩を並べるやうな達人になり得る時間を有たなかつた事も記憶する必要がある。家庭の管理及び社會上の義務のために女子の時間は全部占領されてゐたから。

24

永久に名を殘すやうな作物は名聲を望む事から鼓舞されて居た。けれども、今の女子は滅多に名聲を渇望しない。この特性は女子の境遇から來る自然の結果である。男子に名聲を與へたようなものは女子には塞がれて居た。社會は尙又婦人の趣味を、婦人の日々の生活が如何なる印象を彼女に關係する人々に與へるかと云ふ處にあつめさせて仕舞つた。男女間の凡ゆる相違を説明するには、社會がどう云ふ風に婦人を訓練したかを見れば充分である。

25

道德上の相違に關しては女子は男子よりも善良であれと命じられて居る。けれども、これは、より善き者がより惡き者に服從すべきであると云ふ設定された秩序である。恐らく服役が女子を退歩させる以上に權力は道德上男子を腐敗させるかも知れない。又、女子は容易に刑法上の罪を犯さないと云はれてゐる。併し他の者の管理の下に居る者はめつたに罪を犯す事は出來ない。

26

道德上より善くあれと命じられて居ながら、女子は同情に歸する處の道德上の偏重により多くの責を負はされて居る。けれども、其の一般法に對する證據は充分でないのみならず、若し女子が他人との關係に於て誤まつたとするならば、男子は彼等自身に關して偏頗になつてゐる。社會も又女子の義務に就ては社會に直接都合よきやうに女子を敎へ込む。

27

若し女子が不平を稱へないならば、其服從に對する議論が起つて男子の注意を促すやうな事はないであらふ。併しそれだからと云つて女子の服從が不正でないと云ふことにはならない。疑ひなく一般婦人は夫の力に關して不平を云はない。若し一婦人が夫の承認せぬ或る運動に參加するならば、その婦人は自ら殉道者となる。それ故女子が女子解放運動に參加しようとするならば、先づ男子が其の運動に加はるように準備が出來てゐなければならないのである。(もう一回で完結)

『女』の紹介

マグダレン
マルクス著

新しい女、新しい女のうちの最も新しい女が佛蘭西に生れた。彼女は自分につながる時間的の關係、空間的に自分にまつわる一切の情實を投げ捨てゝ云ひかへれば一切の因習から脱して、そして、眞裸體になつて立つて見た。そして、其の眞裸體な自分の姿を『女』と名づけて社會に放り出した。彼女の名前はマグダレン●マルクスと云ふのである。數千年の間因襲の殼にかたく包まれ、壓迫の上衣で深く覆はれてゐた女のたましいの正體は一體どんな姿のものであるか、男には勿論女自身にも今迄分つてゐなかつた。そして、男からは『女は謎である』などゝ云はれてゐた。

處が、今度此のマグダレン●マルクスの『女』によつて女のたましいが其の赤裸々の姿を現したのである。其處で、私共女性は其の『女』に親しく接し熟視し、其の『女』の姿を鏡として自分の姿を變へなければならない。男は此の『女』によつて女性の本質を知り、一生の幸福を得る準備をしなければならない。『女』は以上述べたやうな性質の書物であるので、佛蘭西

に於ては實に文字通りに羽が生へて飛ぶように賣れたのである。しかも、出版されてから日ならずして既に爭ふて歐洲各國語に反譯されつゝある。で、私も愛する我が國の靑年男女のために、二ッには婦人問題研究家のために此の新しい女のうちの最も新しい『女』を我が國に移し植へようとして忙しい時間を割いて反譯しつゝある。

マグダレン●マルクスは此の著作のために一日にして世界的に有名な小說家となつた。此の小說のためには講演會が開かれたり、あらゆる著名な哲學者、批評家、小說家達からは熱狂的な賞讃の聲を浴せられたのであるが、其のうちの幾つかを擧げて見るならば、

■ロマン●ローラン(Romain Rolland)は云ふ。

偉大なる才能、實に氣力盛んなる作である。

■ジョージ●ブランデス(Georg Brandes)は云ふ。

獨創的な大膽な作である。

■ステファン●ツバイク(Stefan Zweig)は云ふ。

驚くべきことはこう云ふ作がどうして出來たかと云ふことである。此の小說中の婦人の人間としてのかたちの裏面に女性の全體、女たるの永遠の運命を見ることが出來る。

■ベルトランド●ラッセル(Bertrand Russell)は云ふ。

小說家としての驚くべき天分、驚歎すべき能力よ。

◆有名な畫家スタインレン(Steinlen)は云ふ。
此の小說はライフであり美である。

◆ビクター・マーガリット(Victor Margueritte)云ふ。
此の立派な小說は一大人格を絶對に肯定するものである。

◆イサドラ・ダンキャン(Isadora Duncan)は云ふ。
偉大なる無二な書物である。此の小說に對する一般の、そして、一致した判決は、『文學界に於ける新しいかたち、根本的に獨創、感情に於ては高尙であつて、そして、全體が詩的である。』と。

Henri Barbusseが『女』に與へた序文

實に素晴らしい著作である。紹介のどんな言葉も却つて邪魔になり、おせつかいになる程、此の作のうちには無限に深い人間的な、非常に純な女性的のたましいが活躍してゐる。二枚の表紙の間に納めてある此の顯著なる表現を批評することは其のたましいの根本的なしとやかさと力强い生活を却つて汚しつゝあるように讀者には感じられるであらう。

けれども、私は一人の文士として此の作に對する私の意見を發表したい。又、すべきである。――勿論私は著者にこれを要求されたのではないが――そして、此の作の立派な輝しい創意に尊敬を拂ひ此の作が我々のために如何に重要であるかを發言するの喜びを持ちたい。著者は以前に誰もが口にしなかつたことを云つ

てゐる。そして、それが文學的に、又、倫理的に有意義な事實である。つまり、此の作は赤裸々な女を表現してゐるのである。

一體、今迄には、女と云ふものが論せらるれば論せらるる程、女と云ふものが隱されてしまつてゐた。過多な言葉に女其のものが蔽はれてしまつてゐたのである。けれども、此の作の中から現れて來る優れた女の姿は實に天の默示のように女の光りを輝してゐる。單純な同時に讀者の心に突き入るやうな著者獨特な調子は、我々男子が見たり、或ひは我々男子が昂然として宣言するものに對して、女は男とは全く異つた感じを持つものであると云ふことを讀者に知らしめずには置かない。

この『女』の思想と精神は、舊い因襲に囚はれてゐる男には驚異でありショックである。一般の女自身も亦其の舊い因襲を納得してゐたのであるが、それは女が奴隷的因襲に慣れてゐたからである。併しこう云ふ『女』の思想が常に、又、何處でゝも引き起しがちな反對論は實は如何にも其の反對する理由を缺いてゐるものなのである。

此の『女』は母の本能と云ふ虚僞論に對し、偏頗な愛に對して絶大な强烈な眞實な叫ひを擧げてゐる。此の『女』は、死は唯死んだ人を殺すもので生き殘つてゐる人間を殺すものでないことを知り、そして、それを斷言してゐる。そして、此の『女』は男女關係、母性、及び、苦惱に付いての法則と信仰を新しいかたちに於て

創造してゐる。そして、此の『女』の新しい表現、則ち、全體としての人生の此の新しい表現、若くして、強き、著しくきわだつた此の福音は凡ての人爲的な不自然な思想を征服してゐる。そして、婦人が今や人間の仲間に這入ろうとしてゐる時、子供を唯生んで育てると云ふ役目、單なる下婢である位置を變へようとして其の準備をしてゐる此の瞬間に當つて、實に此の『女』の齎す福音は鳴響いてゐるのである。

　此の著作は必ずや世の所謂宗教に反對されるものである。何にもかもが此の『女』の目と心と胸を通して見られてゐるから。著者の力强き、凡てのものに嚴命を下そうとする意志を通して、此の作の創造的な豐富さは全く一人の人間の絶大なる統一から沸き出てゐる。そして、其の統一は外界のいづれの方面に連絡をつけても決して破られるものではない。又、此の作に於て、著しく目立つてゐるものは一個性の誠實さが、他の作に於ては決して見られない程、尊敬されてゐることである。そして、又、今迄に多く現された相像的人物でも此の作に現れた人物程其れ自身に無關係なものを取り除けてゐるものはない。讀んでゐて讀者は此の『女』が話してゐる事、又は、或る物語りをしてゐることを感じない。唯、讀者は彼女の知つてゐることを移心傳心に知るだけである。

　そして、此の事實から、則ち、凡ての異分子を除外して此の一人の女と我々が熱烈に結びついてしまう親密さによつて

此の著作は我々と共に痛切に生きてゐる。いはゞ一つの世界が我々の目の前に生れて來るのである。そして、其の場面が短くても、又は、長くても、常に重要な死活的な一ッの悲劇がマザ〳〵と現れてゐる。普通の大規模に於ける人生の出來事の全體が此の作のうちに明瞭な輪廓を現して、しかも、詩的に流れてゐる。

　で、先づ此れを簡單に云ひ直せば、著者は大家であること、技巧は微妙であること、そして、筋の展開は世界の凡ての劇を一ッの精神的劇に集めてあると云ひたいのである。實に、此の作は絶大なる印象の全體を統一し表現したことによつて偉大なる著者の天分を現してゐるのである。

　『女』は既成の文學のいづれの階級にも屬さない。此の作は如何なる形式によつても律することが出來ない。どんなに模倣されても其の價値を低うすることは出來ない。實に此の作は力强くて、反逆的で、そして、處女作である。けれども、マグダレン・マルクスは現代の最も高き位置の詩人のうちに數へられなければならぬものである。

　以上で、『女』がごう云ふ性質のものであるかと云ふことはほゞ分つたように思はれるが此の時間的に空間的に一女性につながる因習を全く脱して眞裸々になつた『女』の婦人の義務觀、戀愛觀、結婚觀、職業觀、母性觀が何であるかと云ふことが最も明らかに表現されてあることも此處に一言付け加へて置かなければならない。

教育社會學

私は常に確固とした基礎的智識を得たい。そして、それを皆様にお分けして共に考へたいと云ふ希望を持つてゐました。そして、本號から教育社會學の一欄を設けることに致しました。教育社會學とは社會學を教育に應用しようとするのであります。けれども、紙面の都合上それが出來なくなりましたから、此處には唯其の一端を掲げて次號から本論に入る序文としようと思ひます。それから、お斷りして置かなければならないことは此の講話に於ては私一個の考へは出來るだけ避けて一流の社會學者の意見を御紹介することに勉めるつもりでは居りますが、併し、矢張り、其の一流の社會學者の意見が、私の持つてゐる經(たていと)に編みつけられる緯(よこいと)になるかも知れません。

教育社會學の第一の問題は『社會の要素』であつて、これは四つになります。(一)人口、(二)地勢、(三)人間性、(四)交通。

第二の問題は『社會組織』であつて、これは(一)團體の諸相、(二)社會心、(三)社會階級、(四)組織と制度、(五)政府、(六)民主々義、と云ふことになります。

第三の問題は社會進歩であつて、此の題の下に論ずるものは、(一)人間の挿話、(二)遺傳と變化、(三)自然淘汰、(四)目的淘汰、(五)循環變化、であります。

第一編の社會要素、第二編の社會組織、第三編の社會進歩と云ふ順序は動かせませんが、併し、其の題下に含められた章別は場合によつては無視して、今、私共に直接に痛切に關係の深いものからとつて行かうと思ひます。ですから、章の順序によりますと、人口から始めなければなりませんが、今、云つたやうな理由で、先づ、人間性の問題をとつて行かうと思ひます。

人間性に付てスペンサーは申ました。『社會を造つてゐる個人々々の性質を研究することに

よつての外は、社會の眞相を見ることは出來ない。團體を成して生活してゐる人間を了解しようと思へば、其の一ツ〳〵の要素に迄、其の團體を解剖する必要がある。たとへば、複合物の說明をしようと思へば、其の複合物の單要素に溯つて研究するより外に道はない。團體を成して居る人間が現す各現象は、各人のもつてゐる性質から始まるものである。』と。

ジヤストロー博士は、又、次のやうに云つて居ます。『文明とは人間の性質の活動から來る種々に分れた結果を代表するものである。何となれば、人間の行爲の凡ては文明の凡てと同じやうに、人間の心の生れつき、必要、滿足、可能性、抱負のよつて起る處に從ふものである。』と。

スモール博士は云ひます。『今日の社會學は、今、猶人間の野蠻時代の事實を取り扱つてゐる。』と。

こう云ふ風に、社會の研究に付いてはいろ〳〵な議論があるにしても、先づ、人間性から始めなければならないと云ふことは諸大家の一致する處であります。人間性なるものは、或る點に於ては、無限であつて測り得べからざるものでありますけれども、併し、或る程度迄は科學的の方法によつて說明出來るものであります。人間は働かう〳〵とする多くの傾向を一束にしたものであります。ですから、其の傾向を分類することが、人間性の研究に絕對に必要でありますけれども今迄は其の分類が出來ずに居ました。處で、其の仕事を社會學は致します。社會學は其れ等の無數の傾向に特別な注意を拂ひます。

實に、それ等の傾向が人間と人間との關係を造つて居るのです。たとへば、智識を得ようとする傾向、得た智識を自分を治めるために用ひようとする傾向は確に人間の性質であります。そして、其の智力の成熟の徐々たるものであること、及び、其の他の人間の性質の成熟が徐々たるものであることが、直ちに、教育の可能性を現してゐるものであります。そして、其の性質の發達の度の違ひが人間性の差になるのであります。で、今は、智力の度、並びに、人間の性質の度を計る方法が研究されつゝあります。そして、尺度をもつてものの長短を計るやうに、人間を智力の方面から觀察しやうとしてゐます。こうして、人間性を研究し得る餘地が發見されました。次號から順々に其のお話を致します。



健全なる人生觀が現代政治の不安を一掃する

一

一般の人が今は皆政治に興味をもつてゐる。けれども、政治の眞髓を理解し、政治と精神生活の關係を理解し、政治の發達の意義を了解してゐる者はめつたにない。大抵の人の政治上の興味はあの議案の運命はどうなるか？　この議案の成行きはどうかと云ふやうな處に止つてゐるか、さもなければ、あの政治家、又は此の政治家はどう云ふいふことをしてゐるか？　どう云ふことをしようとしてゐるかと云ふやうな處に興味の中心點を置いてゐるのである。

政治上及び社會上の根本的大問題が目の前に横つてゐても多くの人は其れには全く無關心で、さう云ふことに付いては全然一般的傾向をもつて滿足してゐる。そして、その傾向は黨派機關と政治上の會合とに依て製造された者なのである。又さう云ふやうな局部的の狹い意味の政治にのみ興味を限られてゐない廣い意味の政治を了解してゐる人でも、今日の處では正確に政治を批判するのが困難になつてゐる。なぜなら、人は常に政治生活のごた〳〵騷ぎの中に生活してゐて、其の日〳〵の小い爭ひの喧囂に氣をとられて、其れ以上の、ものを廣く觀察する餘裕を持てなくなつてゐるから。

實に今日は古今未曾有の政治的色彩の濃い時代であるのであるが又一方から見ると非政治的に傾いてゐるとも云へる。つまり政治に對するあいそづかしの浪が今世界を掃かうとしてゐるのも事實である。所謂民主的政府が其の約束を守らなかつたこと、又新らしく出來た君主が以前と殆んど同じやうな權力の濫用を因習的に應用したことなどが、國民を政治から離れさせよ

うとしたのである。で少しくものを深く考へる人は、凡て政治の失敗は政府の形式でもなく、憲法による組織から來るのでもなく、むしろ人間性其のものから來てゐることを認め始めた。

それで、政治問題の全體が絶望のうちに投げ捨てられはしないかと懸念するものもあるのであるが、併しこれは唯理窟として存在するので實地に行はれるものではないし、もし又行はれたなら其結果は大不利益を招くことになるであらう。人間性に改良の餘地が絶對にないと證明されない以上は社會的自家保存の本能が私共をして社會は完全に成り得ると云ふ假設論を立てさせ、それに刺戟を得て、其の假設論の上に私共を活動せしむる。

其處で第一に來る問題は、一國内に於てと同じやうに國際間に於ても、なぜ政治道德はこのやうに低いかと云ふことであるが、政治道德が後れてゐる理由は、一體、政治と云ふものは君主政治であれ貴族政治であれ民主政治であれ、常に群衆の上にのッかゝつてゐるものであつて、そして群衆の倫理的發達は群衆特種の心理の結果として個人の場合よりも非常に遲れてゐるからである。

であるから、政治道德の標準を高くする努力は一種の文化の仕事であらればならない。むしろ、文化の社會化でなくてはならないのである。そして、其の文化は其の國々特有の根のある文化でなくてはならない。もし、それが輸入文化の種であるとしても、それが土着化することができて、花がつき實がなる文化でなくてはならない。今のやうに文化々々と云つても其の文化の大抵が外國の切り花か、或ひは又造花のやうなものであつてはならない。一時は人の目をひいても根無し草では何にもならないのである。さう云ふ文化を私は意味するのではない。

二

其處で私共は特に二ツのものにひつかゝらないやうに注意しなければならないが、其の二ツのものとは獨斷と空想である。一體、政治は實に此の獨斷と空想によつて構造されてあるのであることは事實だが、併し私共が又其の獨斷と空想を用ひた處がそれによつて政治生活の關係を了解することは出來はしない。私共が

今日最も必要とするものは獨斷でなくて批評であり、空想でなくて健康な懐疑である。政治が取り扱つてゐる實在はいつも隱されてあるから、政治に於て第一に必要なものは任せることでなく、任せないことである。外交に付いて許りでなく國內に於ても矢張りかけひきが必要である。

普通選擧、婦人參政權、又は、國防問題、平和運動と云ふやうな實際問題に對して一ッの意見を立てることは比較的容易である。けれども、これ等の問題の深みをさぐり贊否の議論を比較し、そして健全な見地に立たうとすることは容易でない。けれども私共は絕對にさうする必要があるのである。

政治と云ふことを考へると同時に、私共は健全な人生觀の必要を思ふ。健全な人生觀を持つことが政治に參與する第一步でなくてはならない。もし其人生觀に既に偏見が加はつてゐるならば、政治は何處迄も間違つて行くに相違ない。もし又人生觀が確乎としてゐないならば外から來るいろ／＼な暗示に容易に囚はれてしまふ。いろ／＼な暗示則ち障碍を乘り越へようとしても、人生觀が確かでないとどうしても途中で難船しなければならない。又外部から來る障碍には切りぬけても內部から來る攻擊に倒れなければならない。人生觀を公平に選むことは困難であるに相違ない。なぜなら、どんな人でも皆それ／″＼の個性をもつてゐて、そして其の個性が無意識のうちに我々を導いて、そして我々の性質に相進する人生觀を持たせてしまふから。

三

今日の政治家のうちで進んだ思想を持つてゐるといはれる人は、大抵社會主義的思想に傾いてゐる。そして今日の政治と云へば產業問題、產業の民主化と云ふやうなことに傾いてゐる。則ち資本主義を倒して產業を民主化しやうと云ふやうな考への方に傾いてゐる。併し此の產業の民主化と云ふ考へが果して健全な人生觀から來てゐるかどうか、又其が一局部の狹い範圍の觀察を基礎にした者でないかどうかを私共は考へて見なければならない。

先づ今日の產業の民主化と云ふことが社會主義者の主張であるとすれば、そして社會主義には少しの差でいろ／＼の違つた派があるが、要するに其のどれもこ

れもがマルクスの說の延長に過ぎないものとするならば、それならばマルクスの人生觀がどの位の社會的觀察の結果であるかを知つて置く必要がある。今より七十年以前、マルクスと彼の仲間は倫敦に於て彼等の共產黨の宣言を公にした。それによつて二大結論が發表されたのであるが、それは平和主義と國際主義とである。そして、この二つはマルクスの歷史の經濟觀から來たものである。

『資本主義は國境を越えて他國へ出て行く。資本家には一國家と云ふ觀念がない。從つて利益さへあれば世界到る處に投資もすれば市場も求める。これに反して勞働は國內に限られ、あまさつへ勞働者は政府又は資本家から期待するものを何にも持つてゐない。故に諸國の勞働者は國の境を撤して團結しなければならない。資本は國際的になつた。從つて勞働組織も國際的にならなければならない』とマルクスは云つて私有財產並びに政府を攻擊すると同時に、世界の勞働者は皆兄弟であると云ふ理想を勞働者に敎へた。そしてマルクスは『產業の自然の發達はいやでも應でも產業機關を勞働者に所有せしむるやうになり、資本家と云ふものは消滅する、同時に所謂從來の國民と云ふものもなくなつてしまふ』と云ふのである。

四

處でマルクスが氣付かない大きな力が社會には存在してゐた。第一彼は愛國主義の力を安く見つもつてゐたのである。最も一八四八年頃の歐洲が見ては（其の當時の歐洲はいくつも〳〵の小國に分離してゐる狀態であつたから）愛國主義を輕く見るのも或は無理もなかつたかも知れないが、併し一八六五年以來の歐洲を標準にするならば、マルクスも愛國主義をもつと重要視したに相違ない。マルクスは又勞働組合主義の價値をも安く見てゐた。一八三七年から一八四八年の歐洲は非常な不景氣で、社會は貧乏と不幸のみであつたが、マルクスは此の十年間の憐れな狀態を基礎として『資本主義の進步は勞働者の貧乏化を意味する』と云ふ原則を建てしまつたのである。

社會の狀態が永久に其の十年間と同じであるならば彼の議論は立つ。けれども、マルクスは其の狹い歷史の土臺から未來を豫言して、『勞働者はます〳〵貧乏に

なり、ますく〵惨れな状態になり、結局は資本主義も其れ自身の力を破壞される。其の時には一種の魔力によつてのやうに資本主義の造つた一切のものを勞働者が所有するやうになる。」と云ふのである。併し果してマルクスの云つたやうになつたであらうか？　一八五〇年以來英、獨、佛、米の勞働組合は非常に發達して、勞働者の狀態も亦大いに改まつたのであるが、これはマルクスの豫言とは反對なものなのである。

勞働立法の效用をもマルクスは見逃してゐた。一八四八年迄には勞働者を保護する法律を持つた國は歐米のうちにたつた一ヶ國しかなかつた。けれども其の後各國が勞働者保護法を設定した。例を獨逸にとるなら勞働保護のための法律は實に完全であつた。ビスマルクの政策は社會主義の勢力を破壞して、勞働者を社會主義運動から遠ざけて、政府の方になづませた程であつた。

もう一つマルクスが見逃してゐたものは資本主義の政治上の力である。其の力は獨逸が最もよく證明してゐる。即ち政府は輸出輸入者を保護し、世界中に擴がつてゐる銀行業者を保護し、資本を世界中に擴げるために資本家を保護し、市場を世界に擴げるために鐵道を買ふこと、溝渠を造ることに於て資本家を保護し、他國の製造品と競爭する製造家を保護した。要するに獨逸の政府は資本家と結託することによつて大事業を完成したのである。これ等の偉大な國民的社會的力もマルクスの考への中には無かつたのである。

五

今回の戰爭中、亞米利加が聯合軍に合した時、亞米利加の社會黨と無政府主義的であるI. W. W. はマルクス主義を奉じて獨逸を勝たせようとした。これに反して勞働組合の方は亞米利加を勝たせようとした。此の兩者共が同じ苦情同じ目的を持つてゐて、賃銀値上げ、時間短縮よりよき勞働條件を要求すること、資本家に對抗するために組織を持つてゐると云ふ點に付いては同じであるけれども、併し其の二者の世界は別なものであつた。即ち愛國主義の違ひがあつたのである。

勞働組合の方は殆んど三百萬の勞働者が組織されてあつて、そして彼等の雇主はそれを認めて、其の代表者と商議をした。三百萬の勞働者は代議政體を設定し、

米國の大代議政體の一部分で其れがあることを自覺しそれを實行してゐた。これに反して社會黨とI.W.W.は米國の資本主義を嫌つて、それを獨逸の資本主義によつて破壞させようと欲望したのである。それから暫々と世界到る處の資本主義が破壞されればならぬこさそして終には勞働者が主權者にならればならぬことを彼等は希望してゐたのである。彼等は露西亞及び殆んど伊太利を倒したやうに米國をも倒さなければならぬと思つてゐたのである。けれども米國は勞働組合の愛國心によつて其破壞を免れたのである。此愛國心をもマルクスは見逃してゐたのである。

もう一ツマルクスが考へてゐなかつたものがある。そして、それは人道的精神である。則ち勞働を商品視することの代りに人間視する力は此の頃益々增して來てゐる。今の處では此の精神が具體的には充分に現はれてゐないけれども、それが一般の要求である以上、早晩勢力になるに相違ない。

六

進歩したと云はれる現代の政治家が心を傾けやうとしてゐる社會主義の共通な泉源であるマルクスの人生觀はかう云ふ風に徹底してゐるとは云へないものである。

完全な政治は正しい權力の平均を目的としなければならない。云ひ直せば社會の凡ての勢力を有效に働かせ、力の無駄を最小限度にすることである。併しながら此の權力の平均を實現する爲には凡ての政黨が共通な平面に立たなければならない。けれども今日の議院組織は此處に大缺點を持つてゐる。たとへば或る政黨は一時的の考へに重きを置き、或る政黨は社會的理論的のことに重きを置き、又或る政黨は實業本位又は農業本位になつてゐる。かう云ふやうに異つた利益を持つて立つてゐたのでは有效な目的を果すに一致できる筈がない。もし一致があるとしても、それは單なる機會に過ぎない。故に共通な一ツの利益に適し得ないのが當然である。

又個人としての政治家のうちには保守主義、進歩主義、自由主義、民主々義、社會主義と云ふやうにいろいろな人生觀を持つてゐる人があるであらう。又國民的の興味、宗教的の興味を持つてゐる人もあるだらう。

實業家があり醫者があり辯護士もあるだらう。が、どんなに主義の違ひ、興味の違ひがあつた處で、各人の人生觀に共通點がありさへすれば、たとひ意見には違ひがあつても同じ平面に立つことが出來る。そして其の共通點と云ふのは世界愛と云ふことである。併し、世界を愛することによつて個人を益しようとするのではなく、却て手近な者を愛することによつて世界を利すると云ふ方が有效な理想である。

そして、進み行く目標としては獨斷の代りに批評、空想の代りに懷疑で行かなければならない。云ひかへれば現代の政治を批判するに、批評と懷疑と世界愛、則ち利他主義が必要である。そして其の仕事は政爭に加はつてゐる男子よりも、其の喧噪の外に立つて、家庭から其の政爭を眺めてゐる婦人に最も適してゐる。婦人は其の任を自身に背負ふ覺悟がなければならない。(國民新聞新年號所載拙稿)

編輯を終つて（一）

存じ上げて居る方々や、御目にかゝつたことはなくても折り／＼書信を取り交してゐる方々は勿論のこと、また、直接に一度も御書面を取り交したことのない讀者の御名前を見ても、其のお一人々々が此の新年をどう云ふ風にお過しになつたかと云ふことを私は考へるので御座いました。と申ますのは私自身が隨分あわたゞしい年越しをしたからです。外から頼まれた新年もの〻原稿を書き上げ、本誌新年號を造り上げ、そして、頼まれた二月號の原稿もいくつか書いてしまつてから私は『女』の反譯に取りかゝりました。元日に日頃一方ならぬ御芳志を頂いてゐる方の處へ新年の御挨拶を申上げに行つた外は暮もお正月も無しに私は毎日々々一生懸命反譯を致しました。一月の五日六日となつて、もう、本誌の二月號に取りかゝらなければならない／＼と思ひながら、もう半日、もう一日と反譯を進める方に慾をかはいて居りました。すると六日の晩に、暮のうちから話がありま

『男らしさ』の定義を變更すべき時

婦人問題は今迄多方面から見られて來ました。性の方面から、家庭の方面から、産業の方面から、政治の方面からも。そして、其の一ツ〳〵がどれもこれも決して無意義ではありません。けれども、一番大切の婦人問題の骨子となるべきものは比較的見逃されてゐました。即ち、婦人の精神的創造の力が忘れられがちになつてゐたのであります。

人は何と云はうと、如何なる反對論があらうと婦人運動の本當の目的は母性の改革と云ふ處にあります。社會の偏見を倒すために社會的戰爭の戰線に立つて勇敢に戰ふ婦人の仕事も無意味ではありませんが、併し、實際社會を改良して行くものは、其の時代が許す範圍内に於て最善な種類の、母性に目覺めた無數の母であります。無數の母達が益々優良な子供を社會へ送り出すことによつて社會は改善されて行くのであります。

過去百年間に文明は以前の千年間に於てよりも進歩したと云はれてゐますがそれは、百年此の方、母達が精神的に智力的に發達の機會を得たからであります。

ですから、婦人運動の原則は最善な母、最善な子供を造るのが目的であります。婦人の內部生活の發達を計るのが其の仕事であります。精神的智力的に發達した婦人は同時に優良な子供を意味し、優良な子供は、同時に社會の進歩を意味するものでありますから、今日迄、人種を繼續し、歴史を造つて來たものは、婦人の解放も、婦人の經濟的獨立も叫ばない、新聞雜誌に意見の發表もしなかつた無數の母であつたことを思はなければなりません。

現代の時代精神とは何でせうか？　人々の心を引きつけつゝある現代の新しい特長は何でせうか？　それは人種改良に對する人々の熱望であります。そして、

今日迄の人種改良の方法が誤つてゐたと云ふ意識であります。して見ると新しい母性の特長は所謂時代精神を代表したものであります。

十九世紀は婦人の世紀であり廿世紀は子供の世紀であると云つて、そして、子供の出來（しゆつらい）、其の處置、其の教育に關する事柄が社會の中心事業となり、凡ての道德凡ての法律．凡ての社會施設がそれ等の事柄の周圍に集り來り、又、凡ての問題を判斷し他の凡ての規則を制定する基準點がそれ等の事柄の上に据ゑられるであらうと云つて、其の時が人間の理想的生活であるやうにエレンケーは云つて居ます。そして、其處に到達する前に精神的社會的に目覺めた母が先づ無ければならないのであります。

過去に於ける偉大な人物の生ひ立を見ますと、それは決して單なる讀み書きの教育を受けた許りではなく母が子供の友達であり、精神的の刺戟であつたのであります。智力的に精神的に子供の友達となり得る母が新時代の母でなければなりません。子供の世界を了解し、其の世界に於て母が首領になることによつて、母は子供のために無くてはならぬもの、子供にとつては其の母が神のやうになるのであります。

子供に好まれるには趣味ある人間でなければならず趣味ある人間になるには想像の國に入る鍵を見出さなければなりません。そして、子供の友達であることによつて、子供が成人した後迄も子と母の間には友情と精神的模範となるものがあります。そして此の關係がやがて理想的の社會を生むのであります。

目覺めた女性の精神的生活はまだ生れない子供の上に偉大な影響を與へます。此處にも有力な人種改善の可能性が現れて居ます。さう云ふ女性は未來に生む子供の健康に付いても考へます。此處に男子の性慾の濫用を防ぎ得る道があります。

精神的に目覺めた母は、又、愛國心にも富んでゐます。けれども、此處で云ふ愛國主義は昔の愛國主義とは違ひます。私の意味する愛國主義は軍國的のものではなく、日々の生活に於ける勇氣であります。新しく目覺めた母も矢張り國のために子供を育てます。其の點は昔の母と變りはありません。けれども、彼の女は國のために死ぬ子供を育てるのではなく、國のために生きる子供を育てます。即ち、外部から國を攻めて來

る敵と戰ふためではなく、國内にゐて、國民の生血を吸つてゐるダニのやうな敵と戰ひ得る聰明な子供を育てるのが目的です。市民の生血を吸つて生きてゐるダニのやうな、市民の幸福の敵が使用してゐる武器は劍や大砲ではありません。彼等常用の武器は、區會、市會、府會又は政黨、官僚、財閥、乃至は團體であります。

さう云ふ敵と戰つて、國民の家庭生活の平和と安定を保護し得るやうな勇者を造るのが新しい母の目的であります。

軍人の理想がなくなつたり、女敎員の數が益々增加すれば社會は女性化して國民の男らしさが消滅するであらうと云ふ人があります。其處で、私は、文明は「男らしさ」の定義を變更すべき境に到達したのであることを切に考へます。

戰爭が罪惡である事、軍國主義が呪ふべきものである事を悟り、武裝解除を理想としてゐる今日、猶、軍人の理想が男らしさの泉源であると考へることは確に時代錯誤であることを私は思ひます。過去の男らしさは大抵の場合腕力作用でありました。けれども、今日に於ては、時代とかけはなれた野蠻人は別として、とにかく、腕力を振ふことの不正であり、恥づべきものであることを人は知つてゐます。

亞米利加の男子はあの世界大戰爭の時こそ戰爭熱を昂めたのでありますが、平生は何處の國の男子よりも戰爭嫌でありました。腕力を振ふことを恥としてゐました。併しながら、米國男子は、何處の國の男子よりも男らしくない、勇氣がないと云ふことは出來ないでありませう。實に彼等は他國の青年達が血氣盛んな年月を軍事の訓練に費してゐる暇を、積極的に國民の幸福の增進となる學業に、產業に、發明に、發見に費してゐたのであります。

先人が立てゝ置いた人智の終點の目標を突破して未知の世界を探すことや、今迄の人が見逃してゐた自然界の力を發見して私共の生活を豐富にすることなどは勇氣を要さないものでありませうか？　軍事の訓練は其の目的が消極的なものであるに反し、これは積極的なものでないでせうか？

又、女らしさとか、女性化さか云ふことは意氣地がなくなつたり、弱くなつたりすることではありません。

此の頃、亞米利加では大砲に向ふよりも、母になることの方がより大なる勇氣を要すると云ふことを認めて人々が其れを口々にする結果、齒科醫は患者に對して今迄は「男らしくなさい。」と云つてゐた處を「女らしくなさい」と云つてゐると云ふことであります。

女らしいと云ふことは、柔弱と云ふ意味ではありません。大抵の男の要求する女らしさはいつもグニャ〳〵してゐることさのやうでありますが、新時代に目覺めた婦人の女らしさは蟲も殺し得ない優しさがあると同時に、不正に對しては百萬の敵にビクともしない勇將の勇氣が必要であります。

昔の武士のやうなタイプの男子が今日現れないのを見て、世界は女性化したなど云ふ人は進歩と云ふことを見ることの出來ない人であります。文明が進むにつれて昔の武士のやうな男子は追々必要でなくなるのです。今日に於ては昔の武士とは異つたタイプの勇者が必要になつてゐるのです。英雄の内容が異らなければならない時に、今、私共は到達したのであります。

最後にもう一度云つて置きたいことは、新しい精神的の母態は任意でなければならないと云ふことです。

いや〳〵ながら止むを得ず母になつたのでは決して有益な母でありません。自ら進んで母になる人は宇宙のあらゆる精神的の力を自分の味方にとり入れます。ですから、力強い聰明な母となり、優良な次代を造ります。婚約のある或る娘が「私は結婚したら、すぐに子供を持ちたい。さう思ふのは女らしくないかしら。」と云つたと云ふことでありますが、かう云ふのが本當に女らしいのであり母になる有資格者です。スピノザは云ひました。

「外部的な偶然に生れた肉慾的な戀愛はたやすく憎惡に變形するけれども、純粹な本當の戀愛は肉慾に囚はれない自由な精神から生れるもので、これには必ず子供を生み育てようと云ふ意志が伴ふ。從つて、永久的なものである。」と。

かう云ふ愛、前述のやうな女の希望の下に生れる子供が幸福な子供、有益な人物になることが出來ます。かう云ふ子供は長い間待たれてゐた結果の子供であります。一時の出來心で出來た子供、不意に望まれもしない處へ生れた子供は不幸であります。たび〳〵逆境に置かれて、社會を呪する曲つた人間になります。人

種が改良されるには、社會が向上するには、所謂理想的文明の實現には、高尚な心を持つた、自覺ある男女の間に子供が生れなければならないのであります。そして、其の子供が育てられる家庭は王宮であらうと長屋であらうと同じであります。さう云ふ子供は母性の本當の喜びと創造力とを代表する光りであります。かう云ふ子供が世界を救ふのであり、此の社會を天國のやうにするのであります。

時代の進歩は男に、破壊的な蠻勇を捨てゝ、母性の創造的事業に共働することを命じてゐます。

もう一言。母は新時代の創造者であると同時に、其の新時代を養ふ環境であります。これを大きく云へば母は國民と其の國民を訓練する社會制度であります。故に、改良された母は、直に、改良された國民と改良された制度を意味するのであります。(東京日日新聞所載摘譯)

編輯を終つて（二）

したけれども、まア御斷りしようと思つてゐた山梨縣へ講演に行くことが、矢張り行かなければならぬことになりました。それは十一、十二、十三日と三日間の講演です。それで、七日の朝は反譯のしかけを一旦かたづけて講演の草稿を夢中になつて作り始めました。すると、其の晩です。田舍の兄から『父死んだすぐ來い』と云ふ電報が飛び込んで來ました。私の頭はぐわんと一つの唸りをたてました。とにかく、私は次の朝一番の氣車で行かうと思ひました。けれども、次の瞬間に日頃の父の言葉を思ひ出しました。もう三年間も床に附いてゐる父は私が見舞に行く度每に『生きてゐるうちにこうして度々來て貰つたから俺が死んだ時にはもう來なくてもいゝよ。外の子供等が仕末はして異れるだらうからお前が忙しい中を來なくてもいゝよ。體を無理をしてはいけないから、體を大事にしてお異れ。』と云つてゐたのを。それで今の場合行かないことが自分にも都合がいゝし、父の意にも從ふことだからと思



ある夕暮

原田琴子

夕方になると子供をおんぶして街を歩くのが私の日課の一つである。はじめの中は子供はうれしさうにあーあーと叫んで空を仰いだり、そこ〳〵の小路にうろついて居る小犬を見て笑つたり、街馬車や自動車の通るのを見て手を振つてはれて居る、けれど間もなくそれらのものに見飽きてしまふと子供は何かそれ以上の珍らしい面白いものを求めるのでもあらう、背中の上でしきりにぐづり出して來る、で私は何かしら子供の興味を牽くものを見付け出さうとして歩きながらあちこちを見まわしてさがすのがいつか癖になつてしまつた。

ある夕方音羽の通りから目白の方へ昇らうとする坂の途中で、一匹の牛が材木を積んだ車を曳かされて今そこの運送屋の店から出やうとするところをふと私は見た。

『坊や御覧、もう〳〵がれ……』

といひながら私はじつとその牛を凝視めた、また恐らく近づいたなら芳ばしい木の匂ひがするであらう、生々しい新木の塊を凝視めた。中は眞黒な毛をかぶつてゐた、そして材木の色は白かつた、夕陽は斜めにその中と材木とそれから一つの鞭を手に持つた人夫の姿とを照してゐた。



人夫は牛を曳いて出かけようとした、が、道は不幸にも坂になつて居る、牛は容易に動かなかつた。人が車をひく場合にも坂道へかゝつた時は屹度するやうに途幅が許す限りのくの字形を造つてまづソロ／＼と人夫は牛を進ませた、けれどそれにしても荷が勝すぎるのであらう、くの字形の一片をやう／＼進んだかと思ふとぢきに車はあともどりをしさうになる、人夫は道ばたから一番大きい石ころを探し出してきてそれを車輪の後ろの方へあてゝあともどりを防いだ。そしてしやにむにひきたてた、牛はつ／＼と息を吹いて、あえぎながら曳かれた。

「可哀想にれ、坊や」

と私は背中の子供をふり返つて見た、子供は大きく目をみ開いて私が指した方をじつと眺めて居るらしかつた。が私の心は今は子供によりも多く牛の方に注がれた。苦しんで居る牛は云ふまでもなく可哀想に思はれた。けれどもそのいやがる動物を無理にひきたてゝ鞭うつて虐げなければならない、否虐げる事が自分の職務であるところの人夫は一層可哀想に思はれた。彼がこれから牛を曳いて行くべき路程、多分は日が暮れて寒い風の吹く町を歸つて行くべきその家庭、そしてその勞働の報い、一日の生活に對する反省……私はさびしい、暗い思ひがした、そして私の足はいつか坂を下りて下の通りへ向つた。

通りは春の賑はひで盛んなものであつた、店には赤い賣出しの廣告があり、樂隊も何處からか聞



えた、ゆきゝの人々はみんな買物らしい大きな包をかゝへてしかもしやれて居た。

「うま、うま、うーま」

不意に大きな聲で子供はかう叫び出した、明るい洋菓子屋のガラス戸の中のお菓子が目についたのらしかつた。實際大人でもつひ欲しくなりそうな美しい、おいしさうなお菓子が澤山並べられてあつた。

「いやな坊やね。うまはお家にあるの」

私は思はず眉をよせた、同時に何となく滑稽な感じもした。けれども足は殆んど無意識に今きた道をまた返つて再び坂を昇らうとした、私達の家はその坂の上の街にあるのだつた。

見るとさつきの牛はまた坂の途中に居た。白い息が夕暮の空氣の中に霧かのやうに發散する、荒々しく何か叫びながら人夫はやはり石ころを探して居た。黄昏の鈍い銀色の光を背景に人と牛と一輪の材木を積んだ車とがくつきりと浮き出して居た。

私はもう何と子供に話しかける氣もなかつた、否そんなことは忘れはてゝ居た。私は彼等に近づくのがいやであつた、とはいへこのまゝ彼等を見すてゝ他の道から歸る心にもなれなかつた、私はわざと足を遲らして、數十間離れた地點にソロ〳〵と歩を運んだ。しかも彼等から目を離さなかつた。

た。可なり永い時間をかゝつて、とにもかくにも牛は坂を昇りきつた、それを見た私の心はほつとした、が何たる思ひもよらぬ事だつたらう、——やれ安心と思ふ間もなくすぐに、人夫は驚くべきほどの敏速さを以て鞭をふりあげた、そしてたてつゞけにぴし／＼と牛を鞭つた。こんどは牛は驅け出した、がそれと同時に人夫の鞭をふりあげる手は一層繁くなつた。そして私があつけにとられて居る間に遠く／＼彼等の姿は町の薄暗の中に消えて行つた。私の心は限りない陰欝に沈まずには居られなかつた。

編輯を終つて（三）

ひまして私と同居してゐる實姉に萬事を委れて姉にだけ行つて貰ふことにしました。じつとして居て暇をかゝずに一人で心のうちで父の葬式をすることに覺悟しました。で、八日の朝未明に姉を送り出してから私はすぐ書齋に入つて一心にペンを動かすのですけれども何かしら追ひ立てられるような氣持ちが押へても／＼わくり上げて來てどうにも仕方がありません。私は堪へられなくなつてペンを置きました。そして、其の追ひ立てられるような氣持ちを解剖して見ました。するとこうです。「これが何百里と離れてゐて行くのに二日も三日もかゝるとか、又は、講演に行く日と差し合つたとか、又は、田舎へ行つたのではどうしても雜誌が出來ないとか云ふならば考へる餘地はない。けれども、金を少し餘計に使へば日歸へりに出來る處だ。仕事だつていつもよりもせいを出していつもの一日半分も進めて置いて、又、氣車の中、車の上でもいくらかすれば差しさわりはないわけだ。そうして行かうと思へば行けるぢやないか／＼」で、私は其の翌日行くことにしました。途中を金で急がせて。私が走せつけた時には葬式が出る計りに用意萬端とゝのつてゐました。母や兄が非常に喜びました。「これですつかり氣がすんだ。來ないと云ふことだつたけれども、

編輯を終りて（四）

もしやさ思つてまだ棺の蓋は打ちつけてない」と云つて兄は私を父の傍へ連れて行くのでした。八十七で枯れるように苦しまずに死んだ父の顏は眠つてゐるようでした。「もうこれでよい」と云つて兄と甥が釘を打ちつけました。すぐに出棺の式ば始まりました。ぢき近所の寺へ送り込んで寺での式はまだ始まらない先きに私は其の足ですぐ歸京致しました。それから山梨縣へ行つて十三日の夜遲く歸へりました。そんなこんなで二月號こそ餘程後れるかと思つて心配致しましたがいつも御好意を持つてゐて下さる印刷者の大杉直次郎氏のお骨折りで大して後れもしないことを私は心から喜ぶと同時に同氏に感謝して居ります。

とにかく父の安らかに永眠した顏を見て來て私の心は非常に平靜になりました。働かなければならないと云ふ勇氣が日頃に倍して私の心身に漲ります。父の眞實な勤勉であつた精神が私のたましひの中に蘇つて來たように今私は感じて居ります。けれども、非常に仕事が立てこんでゐる時に少々無理をして私が父の遺[illegible]に告別をしに行つたことを父は何と云ふだろう。「お前はやつぱり愚劣な奴だ。俺の死骸を見てどうする。土に歸つた俺の顏などご見るためになぜ餘計な金を使つたり時間を無駄にしたりするのだ。なぜ、體を大事にして仕事を勵まうとはしないのだ。俺を思ふ心があるなら、もう、精神計りになつてゐる俺に對してはそれで充分ではないか。お前はやつぱり因習に囚はれた馬鹿な奴だ！」と、思て居るかどうかを私は今でも疑つて居ます。

講演は山梨教育會東八代支會女子部會の主催になるもので御座いました。水晶のやうな水の流れる笛吹川のほとりから、純白に粧ふて巍然とした雄大なる姿の八ッが嶽、駒が嶽、日本アルプスを仰ぐのは、實に壯絶快絶と云ふのは此のことだと私は思ひました。聽講者は娘さん達が重もで其の娘さん達の殿人かは山を越へ谷を渡つてわらじばきで會場に來られたのでした。道か非常に惡いのです。「ああ、もし、私もわらじばきで會場へ行くのだつたら其の娘さん達と氣分がシックリ一致してどんなに愉快であつたらう」と私は思ふのでした。道が不案内であつたり殊に時間を惜しむために車で計り歩いてゐたことが本當に殘念でした。健康そうな赤い顏、有益な仕事に慣れた太い指を持つた娘さん達、あなた方が國家の基礎でありますぞ。あなた方が本當の美人でありますぞ。ペラ／＼した着物を着て白粉を塗り立てゝゐる都の娘達が一寸した風にもおじけて意氣地のない樣子をしてゐる時にあなた方は八ッが嶽駒ヶ嶽から吹き下す寒風に平氣で丈夫な顏を向けて御ゐでになる。都の娘達は半分死んでゐるに反してあなた方こそ本當に生々した有益な次代のお母樣であります。あなた方が本當に美しいのです。脆弱な都の風習や不健全な新思想に眞純なあなた方が害されないことを私は切に祈つて止みません。

同時に其の貴い若い婦人達に私を御引き合せ下さつた教育會の方達に私は多謝致します。

婦人と新社會

自一號至十號
四六版百五十頁

合本

總クロース
金字入美本

定價貳圓五十錢

婦人と新社會は外の雜誌と違つて殆んど一人の手になるものであり從つて議論が一貫して居りますため揃へて持つて居たいと云ふ希望者が大分ありました、それで今度合本致しました。御希望のお方には實費貳圓五十錢で御分け致します。御希望の方は至急婦人と新社會へ御申込み下さい。

本誌定價表

一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

■誌代及郵税は前金の事■郵券代用は五厘切手にて一割増■廣告は御照會次第御相談いたします

大正十年一月二十三日印刷納本
大正十年二月一日發行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎

東京四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會
振替東京五三六八八

山田わか著譯書目

社會に額づく女（定價二圓三十錢）東京麹町區平河町六ノ一 耕文堂發行

女（マグダレン・マルクス原著）（近刊）東京麹町區平河町六ノ一 耕文堂發行

若き愛と智の眼覺（定價一圓二十錢）東京牛込區新小川町三ノ十九 日本社

婦人の解放と性的教育（定價七十錢）本郷區湯島天神町一ノ八二 東洋出版社發行

再版 戀愛の社會的意義（定價二圓）東京市四谷區南伊賀町四一 婦人と新社會社

女・人・母（定價一圓七十五錢）東京本郷春木町二丁目 森江書店發行

八時間勞働の理論と實際（ツイバー女史原著）（定價四十錢）本郷區湯島天神町一ノ八二 東洋出版社發行

愛と生活さ（定價一圓三十錢）東京神田表神保町六番地 三德社發行

賣笑婦の研究（マイナー女史原著）（定價一圓六十五錢）東京麹町區飯田町一ノ二 天佑社發行